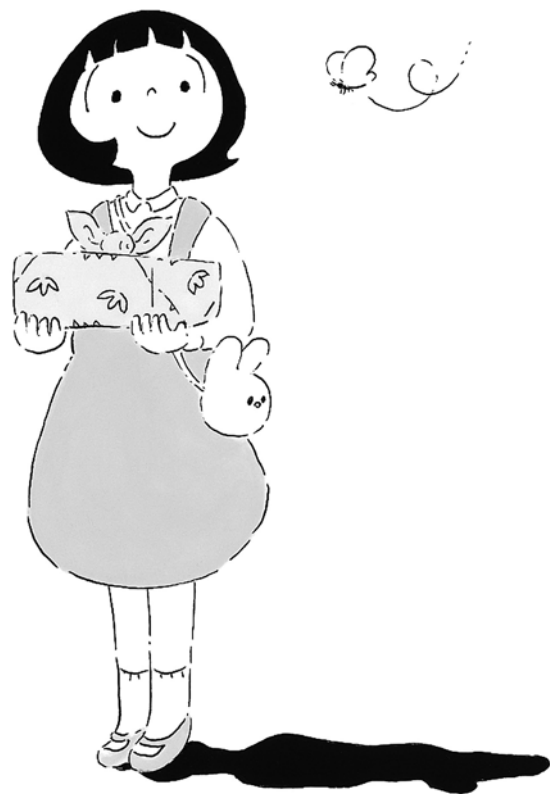


道草をくう

1

レンちゃん、



とびきり春らしい天気のせい、きょうはコトノハ町のあちこちに、道草をくっている人がいます。公園、空き地、田んぼのあぜ道。とくに町の真ん中を流れるコトノハ川のそばは人気のようで、子ども大人も土手の草の上にすわりこみ、のんびりと道草を楽しんでいます。

ところが一人だけ、

「わたしは道草なんてくわないもん」

と、土手ぞいの道をすたすたと歩く女の子がいました。

名前はレンちゃん。お母さんが作ったあんころもちを、おじいちゃんにとどけにいくところ。

「きつと、おじいちゃんよろこぶなあ」

レンちゃんはフツツと笑うと、あんころもちがはいった重箱を

しっかりともちなおし、歩くスピードをあげました。

と、そのときです。

土手のほうから風がふきぬけて、レンちゃんの鼻さきに、ふわっと草のおいをはこんできました。レンちゃんは思わずたちどまって、土手のほうをながめます。

すると、そこで道草をくっている人たちは、ほんとうにのんびりしていて幸せそうで、レンちゃんは、きゆうにうらやましくなってきました。

「うーん」

レンちゃんは、小さくうなずいてなやみます。

おじいちゃんには、おやつの時間までにくからね、とつたえてあります。はやめに家をでてきたので、まだよゆうがあります。

「うーん」

レンちゃんはもう一度うなると、

「わたしも……ちょっとだけ！」

スキップしながら土手においていき、草の上にすわりこみました。そうして、やわらかそうな草を一本ちぎると、ぽいっと口にほりこみ、むしゃむしゃと道草をくいだしたのです。

ぽいつ、むしゃむしゃ。ぽいつ、むしゃむしゃ。

町の人たちにまぎって、レンちゃんは道草をくいつづけます。みずみずしい草、あたたかな日ざし、きらめく川面、ふきぬけるすずしい風——ああ、なんてすてき！ レンちゃんは、うっとりしてし

まいます。

まわりの人たちも、もちろんおんなじ。レンちゃんの前のほうでは、作業着がたの男の人が、口にくわえた草をくちやくちやさせながら昼寝中。どうやら食べてすぐ寝てしまったらしく、足のほうからみるみる牛になっていきます。

そして、そのとなりでは三人のおばさんたちが、おしゃべりに花をさかせている真っ最中。

「この土手は最高ねえ」

「日あたりはいいし」

「草の味もばつぐんよお」

おばさんたちがしゃべるたびに、あたりにぼんぼんと花がさきます。色とりどりの花がさきま

レンちゃんはそれをながめながら、きれいだなあ、とまします
うっとりしていました。が、ふと、そばにいていたあんころもち
がはいった重箱じゅうばこを見て、

（あつ。そろそろ、おじいちゃんちにいなくちゃ）
と、思いだします。

しかし、思いだしたはいいものの、うごく気になれません。草の
上でじっとしているせいかな、おしりがむずがゆくなってきました、

「うーん、もうちょっとだけ……」

レンちゃんは、また草をぽいと口にほうりこむと、むしゃむ
しゃと道草をくいつづけたのです。

ぽいつ、むしゃむしゃ。ぽいつ、むしゃむしゃ。

ぽいつ、むしゃむしゃ。ぽいつ、むしゃむしゃ。

ぽいつ、むしゃむしゃ。ぽいつ、むしゃむしゃ。

それから、どれくらい時間がたったのか、土手をてらしていた太
陽ようがかたむきだしたところ、

——うう……。

かすかなうめき声がありました。

レンちゃんは、ハッとしてあたりを見まわしました。すると、ま
た、

——うう……くらい。

——うう……せまい。

その声は、重箱じゅうばこの中からきこえてきます。

気になったレンちゃんは、つつみをほどこいて、そっとふたをあけてみました。と、そのとたん、

—— 明かりだぞ！

—— 空気だぞ！

—— 自由だぞ！

—— よし、みんな！

—— 思いっきり！

—— 羽を伸ばすんだ！

重箱じゅうばこにならんでいた六つのあんころもちたちが、いっせいに、おう！ とさけぶなり、羽を伸ばしてとびたつていったのです。

「まって！」

レンちゃんは、あわてておいかけようと思いました。ところが、ど



ういうわけか、根がはえたようにうごけません。

「あつ、もしかして」

とっさに、おしりをかくにんすると、思ったとおり、びっしりと根がはえています。

そっか、このせいでむずがゆかったんだ、なんて考えるひまもなく、レンちゃんは両足をふんばって、地面から根をひきぬこうとしました。けれど、いくら力をいれてもビクともしません。

そのあいだに、羽を伸ばしたあんころもちたちは、どんどん遠くへとんでいきます。

「まって！ まって！」

すると、あせたレンちゃんのおしりに火がついて、根もとがチリチリと焼けていきました。

「あつっ」

さけんでとびあがったそのひょうしに、おしりの根がきれ、ようやく自由になりました。

しかし、自由になったはいいものの、いきおいあまってでんぐりがえり。昼寝をしていた作業着すがたの男の人にぶつかってしまいました。

「あいたた、なんだ？」

男の人は目を覚まして、あいかわらず草をくちゃくちゃさせていました。が、自分がぜんしん牛になっていることに気がつく、びっくりしたようにさけびました。

「しまった！ 食べてすぐ寝るなんて！」

それから、前足につけたうで時計を見ると、さらにおどろいたよ

うにさけびました。

「しまった！ とつくに仕事の時間じゃないか！」

すると、その声いきこえたのか、おしゃべりに花をさかせていた三人のおばさんたちも、

「たいへん！ ドラマの再放送がはじまるわ！」

「あらやだ！ スーパーのタイムセールにおくれちゃう！」

「いけない！ 歯医者の予約をしたのに！」

花をまきちらしながら、あたふたしだし、さらに土手にいたほかの人たちも、

「デートにおくれる！」

「バスの時間だ！」

「塾にいかなきゃ！」

「ピアノのレッスン！」

「犬の散歩が！」

そんなわけで、道草をくっていた人たちは、みんな、あわててたちあがろうとしたのですが――

「なんてこった！」

「おしりから！」

そう、みんな、根がはえてうごけません。

そんな中、一人だけうごけるようになっていたレンちゃんは、ひっしにあんころもちをさがしていました。

しかし、いくらさがしまわっても一つだつて見つからず、そのうち、川のむこうの役場から、夕方の五時をつげるチャイムが流れてきました。

「もう、こんな時間！」

レンちゃんはからっぽの重箱じゅうばこをかかえて、おじいちゃんの家にかかってかけだしました。

おやつ時間はとくにすぎているのに、おじいちゃんは縁側えんがわにすわってまっています。

「おじいちゃん、ごめんね。わたし、道草くっちゃって……」

レンちゃんは、縁側えんがわの前でもじもじしながらいいました。

すると、おじいちゃんは、そんなのどうってことないように、笑わらいながらいいました。

「そりゃ、きょうみたいな天気なら、道草くつてもしょうがないさ」けれど、レンちゃんはやっぱりもじもじしてしまいます。

だって、どれほどまちわびていたのか、おじいちゃんの首は、ろくろっ首みたいに長く伸びていて、頭が天井てんじやうにつきそうになっていたのです。

レンちゃんは、おじいちゃんをそっと見あげました。

（どうしよう、こんなに首を長くしてまってるくれたのに……）

そうです。レンちゃんは、あんころもちをぜんぶにがしてしまいました。たまらずうつむいて、重箱じゅうばこを見つめていると、

「おや、どうした？」

おじいちゃんがさらに首を長くして、レンちゃんの顔をのぞきました。

レンちゃんは、もうだまっていられなくなりました。

「あのね、あんころもちが羽を伸ばしちやって……」

思いきって、重箱じゅうばこのふたをあけたそのときです。

——ふうっ、つかれた、つかれた。

ふいに、頭の上で声がしました。

レンちゃんと思わず顔をあげ、それとうじに、あっ！ とさけ
びました。

なんと、夕日で赤くそまった空を、あんころもちたちが、ふらふ
らしながらとんでいます。

——おい、見てみろよ。

レンちゃんの声で、あんころもちたちも下のようすに気づきまし
た。

——おっと、あれは、

——せまい箱はこ。

——あたしたちがとびだしてきた、

——暗い箱くろい はこ。

——でもさ、

——もう夕方だし。

——羽を伸ばしすぎて、

——つかれたし。

——それじゃあ、そろそろ、

——帰るとするか。

あんころもちたちは声をそろえて、おう！ とさけぶと、いっせ
いに地上めがけてとんできました。そして、レンちゃんが目をパチ
クリさせているあいだに、つぎつぎと重箱じゅうばこにおさまっていったので
す。重箱じゅうばこに着地ちゅうちしたのとうじに羽はきえて、もう、あんころもち

私たちはうごきません。

あつというまのできごとに、レンちゃんはしばらくぼかんとしていましたが、ハッと気がつくなり、

「ねえ、見て！」

おじいちゃんのほうをむきました。

すると、おじいちゃんはニヤリと笑っていいました。

「よし、首を長くするのはおわりだな」

そして、首をしゅるしゅるともともどして、こういったのです。

「じゃあ、レンちゃん、いっしょに食べるか」

「うん、食べる！」

レンちゃんとおじいちゃんは縁側にすわって、あんころもちを食

べだしました。

「いやあ、うまい、うまい」

おじいちゃんは、たちまち二つ目をたいらげて、もう二つ目をほおぼっています。レンちゃんもまけずに、

「うん、おいしいね！」

と、もう一つ食べようとしたのですが、重箱の中を見て、あれ？と手をとめました。

あんころもちの数がおかしいのです。たしか、お母さんは、ぜんぶで六ついれてくれたはず。レンちゃんが一つ食べて、おじいちゃんが二つ目を食べているから、あと三つのこっているはずなのに、重箱の中にはあと二つだけ……。

「うーん、あとの一つは、どこにいったんだろ？」

帰り道、レンちゃんは、コトノハ川の土手ぞいを歩きながら考えました。

「ひょっとして、からすに食べられちゃったのかな？」

土手には、もう町の人たちのすがたはなく、あちこちに根のぬけたあとがのこっているだけでした。

「それとも……」

と、風もないのに、草むらが一か所、ザワザワとゆれているのが見えました。

気になったレンちゃんは、土手におりて、その場所をのぞいてみました。

「あっ……!!」

レンちゃんは小さくさけんで、目を見ひらきました。それから、声をひそめてフフツと笑いました。

なぜって、そこでは羽を伸ばしたあんころもちが、むしゃむしゃと道草をくっていたからです。

1 レンちゃん、道草をくう

【道草をくう（7ページ）】途中でほかのことに時間を使う。馬が、道のわきの草を食べながら行くために、進行が遅くなることから。

【食べてすぐ寝ると牛になる（11ページ）】食べたあと、すぐに横になるのはいけないという意味。行儀の悪いことはするなということを、牛を例にして注意したもの。

【花をさかせる（11ページ）】盛んにする。にぎやかにする。また、成功する。「おしゃべりに花をさかせる」は、つぎからつぎへと盛んに話をする事。

【羽を伸ばす（14ページ）】のびのびと自由にする。

【根がはえる（16ページ）】その場所から動かなくなる。

【しりに火がつく（16ページ）】物事が差し迫ってのんびりしていらなくなる。

【首を長くする（21ページ）】今か今かと待ちこがれる様子。